

畳に座って心ゆくまで現代アートに浸る。



1 第4展示室は132畳の広大な座敷を使用。壁の紅色がいかにも花街らしい華やかさを漂わせている。2 代表作のひとつ「黄樹」。3 NY時代にファッション・ブティックを開いたことがある草間にはファッションにも強い関心があり、ドレスや靴、バッグなどもモチーフにしてい

る。「ハイヒール」。4 作品制作テーマのひとつ「永遠」を象徴する「私の魂を乗せてゆくポート」。5 「Hi,Konni chiwa (Hello!)」をモチーフにした「私の犬リンリン」、「Handbag」からデザインを起こした「宇宙へ行くときのハンドバッグ」など携帯電話となった作品も展示。

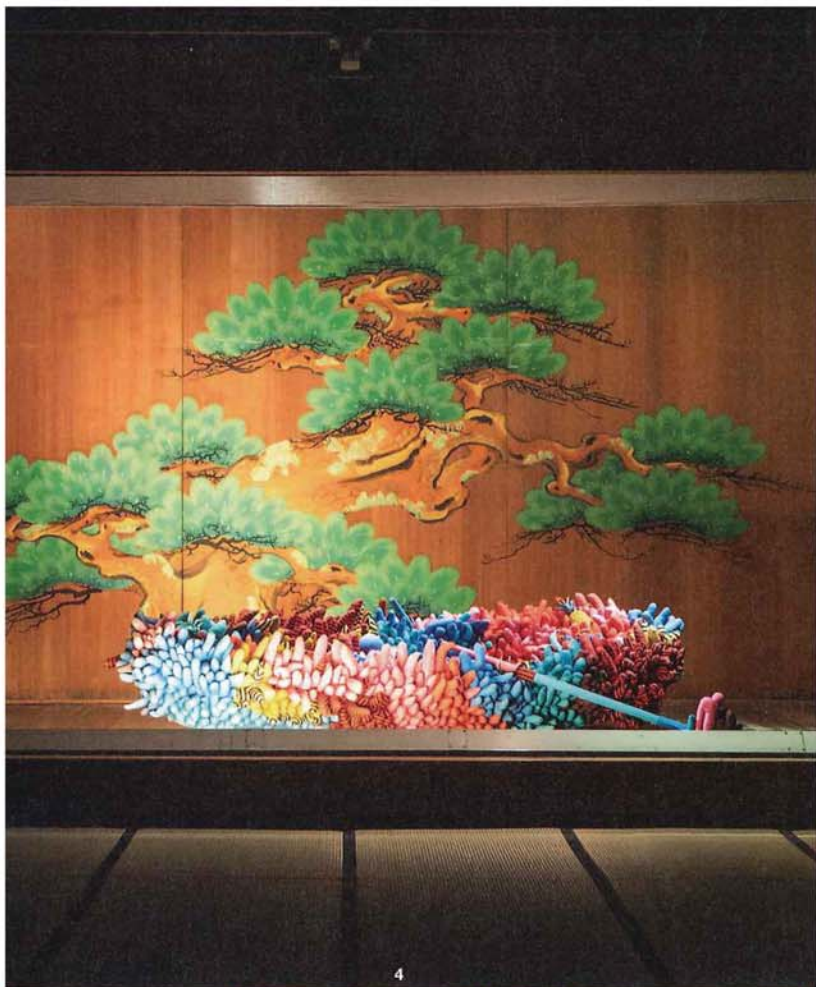
## 祇

團甲部歌舞練場が美術館に!? という衝撃が京都の街を駆け抜けた

のは2017年6月のこと。なにしろ祇園甲部歌舞練場といえは、花街・祇園のシンボルの存在の日本建築。驚きとともに足を運べばそこには5mもの巨大な南瓜がごとんと鎮座していた。

秋田を拠点に30年以上の年月をかけて700点もの現代アートをコレクションしてきた「フォーエバー現代美術館」は、ヨーゼフ・ボイス、アルゼルム・キーファー、リチャード・ロング、宮島達男ら、国内外の現代美術家の作品を多数所蔵する。なかでもその6割を占める草間彌生作品は、日本有数のコレクションだ。草間彌生本人の協力のもと、作品世界を俯瞰で見せるべく初期作から近作までを収蔵。「黄樹」「私の魂を乗せてゆくポート」など、とりわけ90年代頃の作品は大作を揃えている。事の初めは、1993年に松本で開催された個展を、館長の穂積恒が観に行ったこと。そこで出会った「黄樹」の迫力、生命力、緻密さに心奪われ、作品を積極的にコレクションするようになったという。オープニングとして開催中の『フォーエバー現代美術館コレクション 草間彌生 My Soul Forever』展では、1950年から2008年までのオリジナル作品と1979年から90年までの版画作品の計81点を展示。作品の変遷を知ると同時に、草間ワールドに心ゆくまで浸れるポリウムで訪れる人を迎えてくれる。

美術館として生まれ変わったのは、歌舞練場敷地内にある有形登



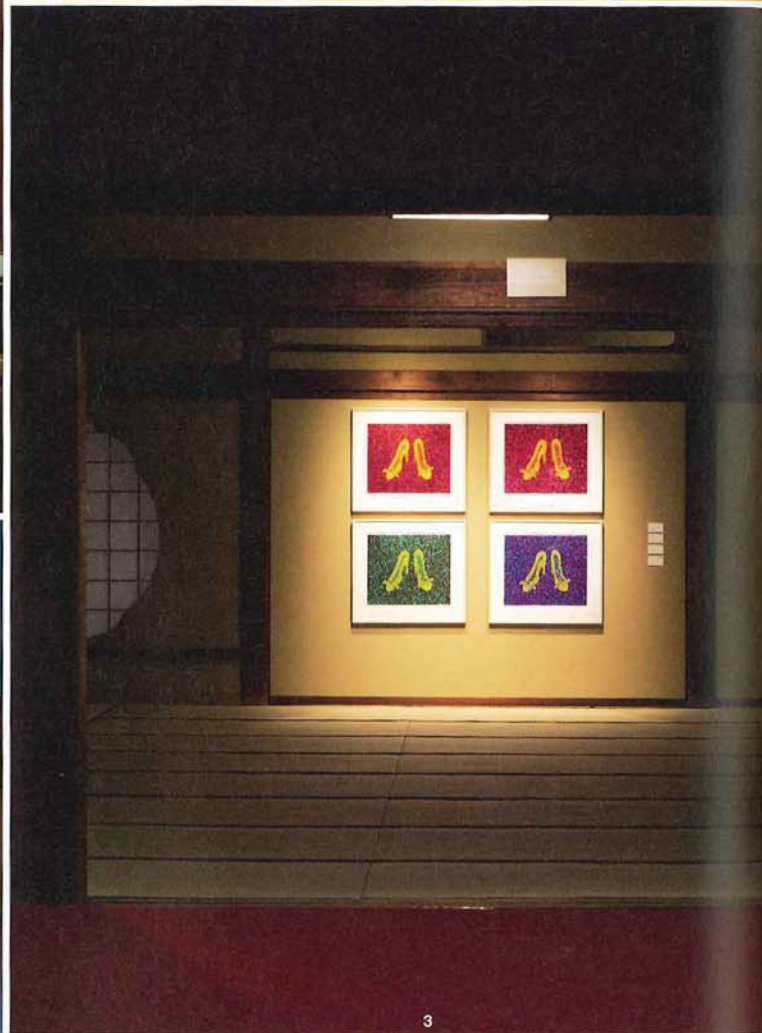
4



5



2



3

録文化財の八坂倶楽部。大正2年（1913）に建てられ、大広間の舞台や美しく手入れされた日本庭園を持つ木造建築だ。画家としての出発点を知る初期作品群の第1展示室、NY時代と帰国後の第2展示室など、4つの展示室でスタートした「フォーエバー現代美術館」。プレオープン期間を経て、2018年3月以降に第5展示室が完成しグランドオープンする予定となっている。

美術館として見たとき、なによりもユニークなのは歴史ある木造建築と草間作品との融合だ。祇園甲部歌舞練場は、祇園の中心にあり、文化財でもある建物。持ち主である八坂女紅場学園から祇園らしさは残したいというリクエストを受け、座敷の畳を活かした美術館という発想が生まれた。伝統文化と現代美術が融合した新しいアート空間は、ここだけで体験できるものだ。総畳敷きの座敷、大広間の舞台はそのままに、壁は紅殻、浅葱、聚楽の黄土色と日本の伝統色に塗り分けた。好きな絵の前で床に座り、鑑賞することも可能というフレキシブルさは畳だからこそなし得たもの。そのため通常の美術館よりも、少し低い位置に作品が展示されているという。見るほどに吸い込まれ、時間を忘れる緻密な草間作品。心ゆくまで鑑賞するのに、実は和室こそが最適な空間だったのかもしれない。

1200年の歴史の中で、絶え間ない革新の積み重ねが伝統を作り上げてきた京都。伝統文化が色濃く残る祇園にて、現代アートに触れること。それは新たな伝統を作る、第一歩になるはずだ。